

飼料用米を給与した『こめ育ち豚』の評価

(株)平田牧場

1. 飼料用米を活用するきっかけ

近年は米の生産調整が進み、現在では日本の水田面積のうち、約35%で水稻が作付けされていません。米どころとして知られてきた庄内地域でも休耕地に大豆が多く作付けされていますが、大豆の単作だけでは連作障害などの問題もあり限界があります。

米以外の作物をなかなか見いだすことができないなか、平田牧場が考えたのが庄内地方の米づくりと環境を守る地域密着型の飼料用米生産であり、それを豚に与えることによって高品質で、安全・安心な豚肉を生産しようという取り組みでした。不耕作地を利用して家畜の飼料用米を栽培し、それを豚へ給与して高品質な豚肉生産を行い、豚の飼養で出た糞尿は堆肥化・液肥化して再び農地へ還元する資源循環型農業の確立、食料自給率の向上、そして米の給与による良食味の豚肉生産を農家と消費者が相互に協力して支え合う・・・そんな構想を描いて歩んでいます。



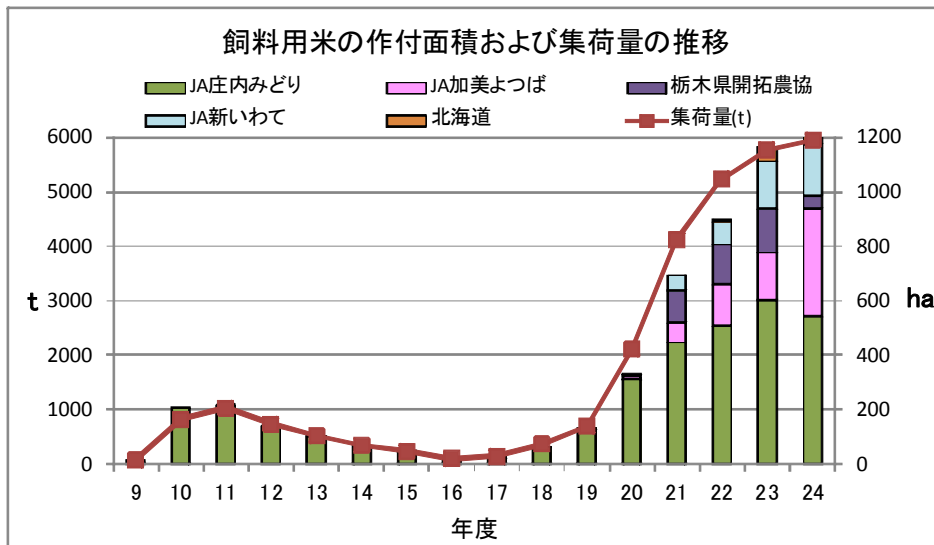
2. 飼料用米活用システムの構築

(1) 飼料用米プロジェクトの概略

飼料用米の取り組みの認知が高まるきっかけは、2004年に遊佐町が小泉内閣の「食糧自給率向上特区」に認定されてからですが、実は庄内地域においては1996年から飼料用米の取り組みを開始しています。当初は他の転作作物と同様に飼料米にも補助金が出たため庄内全域で400軒以上の農家が参加し約220haまで作付けが広がりましたが、その後補助金制度が変わり、作付けは急激に減少しました。2004年からは「飼料用米プロジェクト」がスタートし作付面積が一気に増えました。資源循環型のシステム確立には、米の生産者、農協、全農、飼料会社、養豚企業および消費者の相互協力が重要です。

(2) 飼料用米の生産と流通

プロジェクト開始直後の飼料用米生産は遊佐町のみでしたが、2008年度に地元の酒田市、宮城県のJA加美よつば、栃木県の栃木県開拓農協が加わり、2009年は岩手県のJA新しいわて、2010年には北海道が加わりました。2004年の作付面積約21ha、集荷数量97tから2012年には作付面積1,150ha、集荷数量約5,300t、平均収量は約515kg/10aまでになりました。飼料用米として利用する水稻品種は、食用品種の「ふくひびき」他、飼料用専用品種の「夢あおば」「べこあおば」他、多岐にわたります。



3. 平田牧場での給与システム

肉の旨味は脂肪にあるといっても過言ではなく、その脂肪の質を左右するのは品種と環境、そして飼料です。平田牧場では安全で安心な豚肉生産を行うために、指定配合飼料を給与しています。

肥育期の飼料は肥育前期、肥育後期(仕上げ)共に植物由来であり、動物由来の原料は一切用いていません。飼料用米はこの肥育期飼料に混合していますが、玄米を粉砕し、トウモロコシとの代替として配合されています。



飼料用米を配合した飼料で生産された豚肉は「こめ育ち豚」という名前で販売しており、「生活クラブ生協」が共同購入し、各組合員へ届けられます。



こめ育ち豚の精肉や加工品は皆様から大変好評を頂いています。



4.飼料用米に関するコストについて

一般的に、養豚経営において飼料購入費は経費の約6割以上を占めるため、飼料の価格変動は経営を大きく左右します。飼料用米生産農家の負担を軽くするには、飼料用米の低コスト栽培の実現および飼料用米を畜産農家が高く買うことです。飼料費が高くなれば当然のことながら豚1頭当たりのコストも上がり、それは消費者の負担へとつながります。しかし、世界的な穀物価格高騰の影響から2013年1月時点ではトウモロコシ価格が35,720円/tとなっており飼料用米価格(32,000円/t)を上回っています。今後増々飼料用米利用・普及が必要になってくると思われます。

5.飼料用米利用による発育・肉質と食味の変化

昔から山形県庄内地方では、鉄砲打ち(猟師)たちが、落穂を食べた鴨は非常に美味であると珍重しています。米を食べることにより、肉質が向上しているということなのかもしれません。

実際に飼料用米10%配合飼料を給与された豚と飼料用米が配合されていない飼料を給与された豚の肉質を比較調査しました。ここでは飼料用米10%配合の仕上げ飼料を約3カ月間LDB種へ給与した際の肉質データを紹介します。

(1) 発育・肉質への影響

飼料用米10%配合の飼料については通常の飼料と比較して採食量は変わらないため、嗜好性もそれほど変わらないようです。また、発育については若干早まる傾向がありました。

理化学分析の結果では、主に脂肪への影響が大きいことが推測されました。

(2) 食べてみての食味評価への影響

飼料用米を給与した豚を、消費者である生活クラブの組合員に実際に食べていただきました。

10%区と対照区を用意し、約100名の組合員に対し試食とアンケート調査を行ないました。見た目、香り、食感、味・風味、総合評価の5項目として行ったところ、全ての項目において10%区のほうがよかった、という回答が得られました。特に10%区においては、色つや、脂肪の白さが好印象で、味や総合評価においても非常に良好でした。



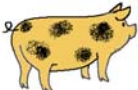

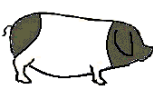
6.問題点と今後に向けての展望と可能性

平田牧場としては10%配合での効果が良好であったことから、この飼料用米プロジェクトの活性化に向けできるだけ多くの飼料用米を給与したいと考えました。飼料用米生産者の負担軽減のために飼料用米を高く買い取れば豚肉の生産費が増加します。一方、消費者は安全で安心な国産の食料を望み、同時に食料自給率の向上を望んでいます。しかし、生産コスト上昇分を商品価格に反映させる必要があるため、消費者に飼料用米生産の取り組み意義を説明し、理解を得た上で購入してもらうよう努力をする必要があります。このプロジェクトを推進するためには、飼料用米生産者、養豚業者、消費者がお互いに協力し、前向きな視点をもって進めることが大事です。そして各々の負担を各々が理解し、いかにして減らしていけるかが課題の一つでもあります。

飼料用米の生産・利用については課題もありますが、食料自給率の向上、高品質豚肉の生産、過剰米対策、環境・景観・農地保全、資源循環、豚尿・豚糞の農地還元、循環型社会形成の起爆剤、新規就農者・雇用者の増加、地域性を考慮した生産維持品目としての位置づけ、消費者と一体となった取り組み、生産者と消費者の交流、食育の促進など、非常に有望な取り組みです。

当初肥育後期への給与で開始した取り組みも、毎年作付面積および集荷量が伸び続け、現在では平田牧場における生産体系全体において、肥育前期より飼料用米を10%給与できるようになりました。つまり、平田牧場で出荷する豚の全頭が飼料用米を食べているということです。これは全国においても類を見ない規模です。

(表)2013年現在の飼料用米給与割合

	平牧三元豚 	平牧金華豚 	純粋金華豚 
肥育前期	10%	10%	10%
肥育後期	10%	15%	15%
米消費量(kg)/頭	30kg	39.5kg	39.5kg



平田牧場の経営理念には「食文化の創造」があります。食とは土地と歴史に根ざすものであり、食べものの価値や社会性を高めていくことが重要であると考えます。「こめ育ち豚」も米を飼料として使用することで豚肉の価値と社会性を高めていく取り組みです。

平田牧場では、今後も組合員や消費者との交流を通して飼料用米生産の取り組みの意義を説明し、田んぼを維持することの大切さを訴え続けていくとともに、飼料用米の取り組みを続け、安全でおいしい豚肉の生産を続けていきます。

